

STEP 0

保幼小連携って？

山口県では、子どもの成長の過程にならって「保幼小」という文言を使用しています。文部科学省では「幼保小」を使用しています。

まずは「保幼小連携」に関する素朴な疑問について確認してみましょう。

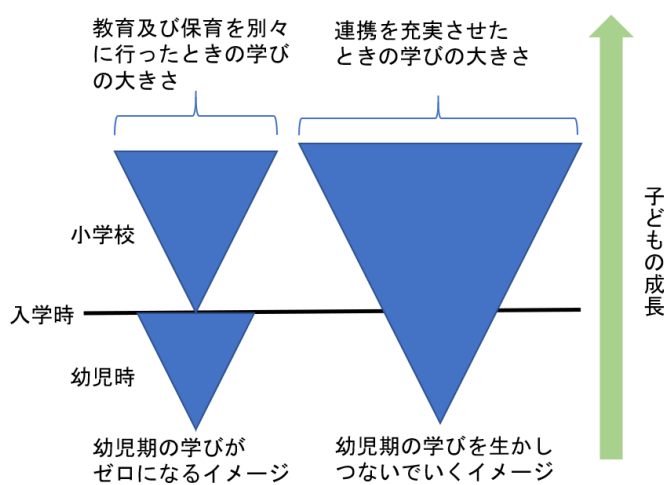


Q1 どうして「保幼小連携」が大切なのですか？

A1. 園と小学校が連携すると、子どもが安心感をもって園・学校生活を送ることができるようになるからです。子どもだけでなく、保護者も安心することができます。

安心感のある生活を基盤にして連携することにより、子どもの力を大きく伸ばすことができます。

右図のように、園と小学校が教育及び保育を別々に行っていると、小学校入学時点で、幼児期の学びはゼロになり、そこからまた学びをつかっていくことになります。一方、連携を充実させると、幼児期の学びを生かしつないでいくことができ、学びの積み重ねが期待できます。この2つの学びの大きさの違いは歴然です。このことは、幼児教育で育まれた資質・能力を小学校以降の教育で更に伸ばしていくことにつながります。一人ひとりの子どもの育ちや学びが途切れることのないよう、環境を整えていくことが重要です。

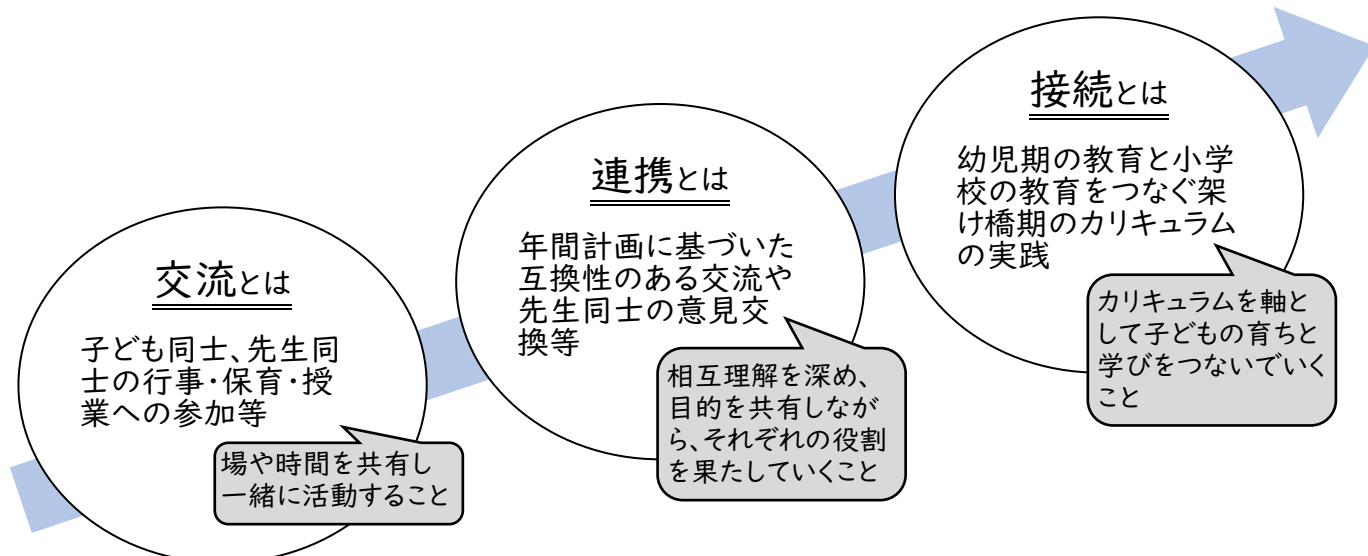


無藤隆「保育の学校」を基に作成



Q2 「交流」「連携」「接続」 同じような言葉ですが、それぞれの意味は？

A2. 「交流」から「連携」そして「接続」へ、取組が進むことをイメージして使い分けてみましょう。





「幼児期の教育を小学校教育に生かし学びをつなぐ」ためにはどうすればよいですか？

A3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を手掛かりにするとよいです。そして、園と小学校の先生が協働して架け橋期のカリキュラムを作成し、実践・検証・改善を行っていきます。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」をどのように活用したらよいですか？

A4. 園と小学校が子どもの育ちや学びを共有する際の共通言語として活用してみてください。園と小学校の先生が、子どもの育ちや学びの姿について話し合うときに、今ひとつ姿をイメージしにくいことがあります。その際、「『協同性』は…」のように、この姿を活用すると、園の先生は、子どもの育ちや学びの姿を分かりやすく伝えることができます。また、小学校の先生も同様に子どもの姿を受け取りやすくなります。まずは、合同での保育・授業参観等を通して、この姿を視点にして子どもの育ちや学びを見取り、話し合ってみてください。



「幼保小の架け橋プログラム」とは何ですか？

A5. 子どもに関わる大人が立場の違いを越えて自分事として連携・協働し、架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことができるようにすることをめざすものです。

小学校入学までに、何をしておいたらいいでしょうか？

そうですね…まずは長時間、椅子に座って、人の話が聞けるようにしてください。それから……

…よく聞く会話ですが…これは本当の意味での連携でしょうか？

5歳児担任

1年担任

保幼小連携というのは、小学校教育の知識・技能の先取りではありません。

保幼小連携アドバイザー

違いの例

園 環境を通した指導

小 教科書等を用いた指導

他にも、文化・習慣・意識…等ギャップはいろいろ

まずはお互いの違いや共通点を **相互理解!**

大人が協働して考える

「遊びを通して学ぶ」の発信と理解を!

これがまさに、アクティブ・ラーニング!

子どもの主体性や、学びの過程を大切に **授業づくり**

どんな種をまいたの？

どのような場面で、どのように種をまいたの？

園の環境

ぜひ!

架け橋期での子どもの情報の伝達・共有ができる連携を!

子どもたちを学校のために準備させるのではなく、学校が子どもたちのために準備することに焦点を当てよう。by.OECD(2017)Starting StrongV

「幼保小の架け橋プログラム」
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」

詳しくはこちら→



※架け橋期…「経験を生かしながら新たな課題を発見し、新しい方法を考え試しながら実現していく5歳児」と「自分の好きなことや得意なことを生かしながら、学びや生活につながる力を育む1年生」の2年間のこと。(P27. STEP3の図参照)



先生がつながる

子ども同士のつながりをつくるために、まずは先生がつながりましょう。



Q1

「先生がつながる」仕組みづくりのために、何から始めたらよいですか？

A1. 管理職のつながりがスタートになります。特に、小学校の校長が調整役となって進めてみてはどうでしょうか。園と小学校の管理職同士のつながりができたら、それぞれ連絡窓口となる担当（保幼小連携担当、園務・教務主任等）を決め、何ができるかを話す場を設定しましょう。まずは「お互いの顔が分かるつながり」をめざすことから始めませんか。

中学校区内にある園、小・中学校の管理職、担当校の教育委員会の指導主事が月1回、連絡会を行っている市町の事例もあります。



Q2

5歳児クラスや1年生の担任が進めるものですか？

A2. 連携の推進役は5歳児クラスや1年生の担任になることが多いですが、全教職員で推進していきましょう。いろいろな年齢・学年が交流することで、連携はみんなで推進するという意識が高まります。保幼小の先生が対話する機会が増えることで、それぞれの教育・保育の特性や先生方が大切にしていること、例えば、幼児教育・保育では「生活や体験を大切にする」「子ども一人ひとりを丁寧に見る」、小学校教育では「系統的に学ぶ」といったことを知ることができます。これは、それぞれの教育・保育の改善に生かすことができます。



Q3

園と学校では、なかなか時間が合いません。どのようにしたらよいですか？

A3. 日常的に交流できる体制づくりと様々なツールの活用を意識してみましょう。保幼小連携は時間調整が難しいです。まずは、人間関係づくりを大切に、教職員同士が積極的に日常的な交流を積み重ねましょう（参観や散歩など）。打合せも、時間が限られているので、電話やメール、オンライン会議システムなどを活用して効率よく行うとよいでしょう。また、交流活動を行う際には、年度末に計画し、次年度の行事予定に入れておくのも有効な一つです。



Q4

（離島やへき地など）小学校区内に園がなく、架け橋期（5歳児・1年生）に該当する園児・児童がいません。どのように取り組んだらよいですか？

A4. 地域の実情に合わせて取り組みましょう。架け橋期に該当する園児・児童が在籍していない場合でも、県や市町が主催する保幼小連携研修会や連絡協議会に参加することで、園と小学校の教職員がつながったり、連携に関する情報交換を行ったりすることができます。架け橋期の園児・児童が在籍するようになった時に、「いつでも・誰でも」進められる体制づくりをめざしましょう。



園だより・学校だよりの 活用法は？

A5. おたよりは連携推進の大きなツールです。互いに交換するだけでも、園、小学校がどのような取組をしているのかを知ることができるだけでなく、子ども同士の交流の始まりにもなります。

例えば、

- ①小学校で運動会があることを知る。
- ②小学生がかけっこをする姿を園児が見る。
- ③園の遊びの中でかけっこが広まる。

園児が校長室に「おたよりゆうびん」を届けている園もあります。

また、おたよりを共有する際、回覧以外にも、定位置にコーナーをつくる、目に付きやすいコピー機の前に掲示する等の工夫をするとより効果的です。



保育参観・授業参観では、どのような視点でどのような場面を見るとよいのでしょうか？

A6. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を視点にして参観すると、子どもの姿を共有しやすくなります。

保育では、自由遊びで遊び込んでいる場面、集団で何かに取り組んでいる場面などを見ると、園児の様々な姿を見取ることができ、理解につながります。給食(お弁当)、片付け、手洗いやトイレ指導なども小学校とのつながりが見えてよいです。

授業では、はじめは、保育内容とのつながりが見えやすい生活科、体育科、特別活動などの教科を参観場面として設定するとよいでしょう。

教科だけでなく、給食、掃除、朝・帰りの会といった生活場面の様子を参観するのもおすすめです。



STEP 2

子どもがつながる

子ども同士のつながりが、子どもの育ちと学びを豊かにします。



Q1 交流活動のよさは何ですか？

A1. 子どもの育ちと学びを豊かにするとともに、教職員にとってもよさがあります。

| だれに | どのようなよさがあるか |
|-----|--|
| 園児 | 5領域のねらいや内容が充実する。 小学校の「人・もの・こと」に親しみをもつ。 園の遊びの中で、今までになかった遊びや遊び方の発想が生まれる。 |
| 小学生 | 各教科等の目標や内容が充実する。 自分の成長に気付く。 遊びや関わり方を工夫するようになる。 |
| 教職員 | 子どもの発達を知ることで、子ども理解が深まる。 互いの教育及び保育を理解することで、自身の教育観が広がる。 子どもの姿から教育及び保育を充実させることができる。 |



Q2 交流活動を行う上での留意点は？

A2. 「どちらにとっても学びがあること」と「継続的に取り組むこと」を意識しましょう。

○「どちらにとっても学びがあること」

交流することのよさを踏まえ、園、小学校がそれぞれ活動のねらいを明確にして、一緒に内容や役割分担等の計画を立てます。特に、園児がお客様にならないようにすることに注意が必要です。そのためにも、交流の中では、子どもたちを集めて先生が説明する時間を少なくし、活動の時間を多くしましょう。

○「継続的に取り組むこと」

子ども同士が関わる時間を確保し、交流を重ねることで、子どもにとって楽しさが増し、思いや願いが生まれます。交流が日常のものになればよいです。「自然体での交流」をめざしましょう。交流のための練習は必要ありません。練習しなくても、「架け橋期のカリキュラム」の実践により、子どもたちは十分に力を発揮します。



Q3 園と小学校が遠いのでなかなか交流ができないのですが、どうしたらよいでしょうか？

A3. 地域や学校の実態を踏まえ、持続可能な方法を考えましょう。おたよりや手紙の交換、制作物の展示、Web 会議システムを活用しての交流会などを行ってみてはいかがでしょうか。手紙が届く、声を聞く、顔を見るだけでも、子どもたちはワクワクするものです。



複数の園と小学校で交流するのは大変だと思いますが、どうしたらよいでしょうか。

A4. 交流活動を充実させるために様々な事例を参考にするとよいです。

例① 入学者数や歩いて行ける距離等をもとに、相手(1~2園もしくは校)を決めて交流している地域があります。架け橋期のカリキュラムも同様に相手を決めて作成しています。

例② 小学校が複数学級ある場合、1組は〇〇幼稚園、2組は△△保育所、3組は□□こども園…など、担当園を決めて、年間を通して交流している園・小学校もあります。



交流活動後の留意点は？

A5. 子どもたちに活動を通して学んだことを意識化する声掛けをしたり、それぞれの教育及び保育の中で活動を発展させたりすることが大切です。

また、交流の質を高めるために、振り返りを十分に行い、次のように交流の幅を広げていくことも検討してみてください。

例① 5歳児と1年生との間だけでなく、様々な子どもたちと交流を検討

→ 5歳児と5年生との交流は、次年度には1年生と6年生に

例② 5歳児と1年生の担任だけでなく、様々な学年の教職員の参加を検討

→ 様々な学年の交流活動や、養護教諭や栄養教諭等との関わりを年間計画に

例③ 交流活動に保護者・地域の人を巻き込む。

→ 保護者・地域の人も参加できる行事を活用して、参観するだけでなく参加型の交流を



STEP 3

育ちと学びがつながる

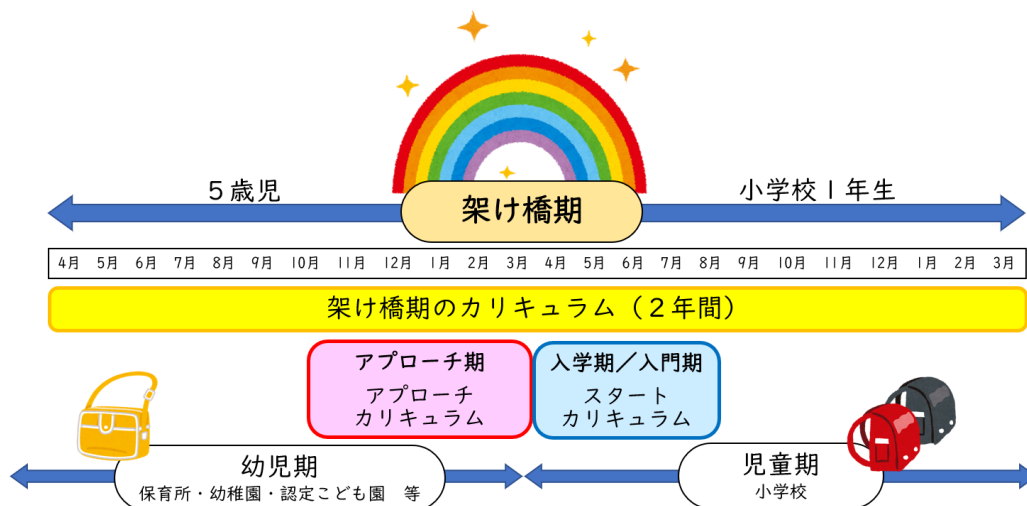
保幼小のつながりを意識して「日々の教育及び保育」を行っていくことで、子どもの育ちと学びをつなげていきましょう。 詳しくはこちら↓



架け橋期のカリキュラムとは何ですか？
アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムとの違いは？



A1. 大きく違うのはカリキュラムの期間や作成者です。



| カリキュラム | 期間 | 作成者 | 内容 |
|--------|------------------|----------|---|
| 架け橋期 | 5歳児～小学校1年生の2年間 | 園と小学校が協働 | 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を手掛かりとし、育成をめざす資質・能力を視野に入れたもの。 |
| アプローチ | 就学前 5～6か月間が目安 | 園 | 就学前の幼児が円滑に小学校の生活や学習に適應できるようにするとともに、遊びや生活から得た経験を生かして学習や生活に意欲的に取り組んでいけるように工夫したもの。 |
| スタート | 入学後 4か月間が目安 | 小学校 | 幼児期の遊びや生活を通じた育ちと学びを基盤として主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出し、円滑に移行していくためのもの。 |



架け橋期のカリキュラムを作成すると、どんなよいことがありますか？

A2. 保幼小が共通の視点を持ち、協働して作成することにより、子どもの育ちと学びの連続が保障されます。また、計画的な実践とともに、教育及び保育を見直すことが習慣になります。さらに、担当が変わっても一貫性のある教育活動を行うことができます。



行政として、架け橋期のカリキュラムの作成や改善のため、園や小学校へ、どのように働きかけたらよいでしょうか？

A3. 教育委員会や市町の保育主管課は、小学校区にカリキュラム開発会議の設置を促してみましよう。会議自体は学校運営協議会や園・校長連絡会等、既存のものを利用します。



どんな視点で話し合えばよいですか？

A4. まずは子どもたちの実際の姿から、めざす子ども像について話し合ってみましよう。めざす子ども像が決まると、カリキュラムに表すものが整理されるとともに、カリキュラムに特色が出て、作成の意義が増します。視点についてはリーフレット「はじめのいっぽ」を参考にしてみてください。

詳しくはこちら→



話し合いの際は何を参考にしたらよいですか？

A5. 例① 市町の教育目標や園・学校目標、保育・教育方針がわかるもの（保育全体計画やグランドデザイン等）…めざす子ども像について話し合うときに役立ちます。

例② アプローチカリキュラム、スタートカリキュラム…育ちや学びのつながりや指導上の配慮事項を考えるのに役立ちます。



地域や保護者への啓発を進めるためには？

A6. 「保幼小連携」で行ったこととそのよさを様々な方法でどんどん発信ましよう。例えば、園・学校だよりや懇談会のときなどに伝えることができます。また、就学時健康診断の際に、保護者向けに幼児教育と小学校教育のつながりに関する講演会を開いている小学校もあります。

